

サーカス無宿

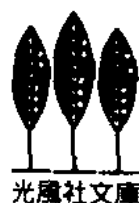
特攻

青山光二

仁義



Nob
1/14/77



特攻仁義—サーカス無宿—

あ 2 - 2

著 者	青 山 光 二
発行者	深 見 兵 吉
発行所	光風社出版株式会社
	〒112 東京都文京区春日 2 - 4 - 1
	電 話 03(5800)4451
	FAX 03(5800)4452
印 刷	サ ン ワ ー ド 企 画
製 本	株式会社越後堂製本

© K. AOYAMA 1995 Printed in Japan

ISBN4-87519-896-5

乱丁、落丁の場合はお取り替えします

定価・発行日はカバーに表示してあります

特攻仁義—サーカス無宿

青山光二



光風社文庫

目次

第1章	サーカスの掟	5
第2章	無宿の唄	52
第3章	特攻隊仁義	98
第4章	新宿西口、楽隊 ^{ジンタ} は哀し	134
第5章	頽廢の花は港都の夜に	169
第6章	興行香具師 ^{テキヤ} 流れ者	213
第7章	別れの演歌 ^{うた}	255

第1章 サーカスの掟

1

四国・九州巡業の帰途、甲府・宇都宮・盛岡・八戸はちのへ・青森と打ってきたシマダ・サーカスの次の興行地は北海道の名寄なよろであった。芸人・楽士・裏方、それに家族、あわせて百名ほどの座員総勢が、客車一輛を占領して賑やかに、うちつれて津軽海峡を渡ったが、サーカスぐらしの男女にとって、遠乗りの車中くらい楽しい時間はない。まして、四ヵ月ぶりに本拠の北海道へ帰るのだ。シマダ・サーカスの本体である島田興行部は札幌にあるのだし、座員も大半が北海道出身者であった。飲んだり食べたりしゃべったり、睡りどおしに睡る者もあれば、飽あきもせずに花を引いて窓外など見向きもしない者など、とりどりの表情を和氣藹々あいあいの空気がつつんだまま、稚内わっかない行き急行列車は北へ北へと進んで行く。

5
芸人は圧倒的に女が多いが、彼女らがこの移動にただ一つ、ものたりぬ想いを禁じえないのは、歌の上手な支配人の河津研次がないことだった。ギターを爪弾ひきながら、サビのき

いた低い声で彼の歌う『裏町人生』や『君恋し』、『ゴンドラの唄』……、その哀調に聴き惚れて、彼女らは、旅から旅に明け暮れる漂泊の人生の疲れをいやされる気がするのだった。若いくせにナツメロに通曉つうぎょうしているのは、河津が古風な心情の持ち主だからといってはウガちすぎようが、彼は、およそ戦後派らしいドライなところのない人間だった。つまりそんなところを団長の桜井清典や島田興行部のおやじが見こんで、支配人の仕事を河津にまかせているわけだ。

シマダ・サーカスにはもう一人、商業学校出の支配人がいたが、これは経理担当で、歩方ぶかたへ興行主との交渉や渉外関係の仕事は、いつさい河津が一人でやっていた。というより、こんどの巡業のあいだに彼は、そういう支配人の仕事をおぼえこんだのだ。

河津は、青森合浦公園がっほでの興行を打ちあげる前日に、道具方数名とともに青森を発たって、先乗りで名寄へ先行していた。大道具・小道具類も、打ちあげの翌朝、貨車で先に送り出してあった。

サーカス一座の乗りこんだ列車が札幌駅のホームにすべりこんだのは午後四時をだいぶ過ぎた頃だったが、ここで何にんかの裏方が下車した。札幌に家のある連中である。二日後の六月二日からの名寄での興行は仮設小屋ではなく、劇場を借りて行なうので、裏方の手がいくぶんあまるからでもあった。島田興行部のおやじの甥に当る仲店主任の志垣篤も札幌で下車した。ハコ打ちへ劇場で興行することでは仲店も出せないのである。降りるとき志垣は、どこことなく皮肉な口調で、太夫たゆうの木ノ宮明美に話しかけたものだ。

「旭川で降りるんだろ、明美ちゃん」

「……………」

「ひと晩くらい、お父つあんの看病をすればいいのに」

「だって稽古があるもの」

「ピカ一のベテランが、いまさら稽古なんか気にすることないだろう。名寄で彼氏が待ってるんじゃないの？」

一瞬、どきつとした表情になりながら明美は、強い光のやどった目で、剃りあとの蒼い志垣の顔を睨むように見返した――。明美の父、木ノ宮栄造は旭川大町の自宅で、長患いの床にあつた。島田興行部は、戦争が終つて間もない昨年末、シマダ・サーカスに極東サーカスを吸収合併し、合併後のさいしよの興行が、こんどの四国・九州巡業であつた。極東サーカスの経営者兼団長が木ノ宮栄造であり、合併の金銭的な条件は明らかでないが、合併に際して島田興行部の代表者島田武次郎は、木ノ宮の次女明美を養女にし、ゆくゆくシマダ・サーカスの名義を明美にゆずると約束したという。島田武次郎と木ノ宮栄造は、もともと、稼業の上の兄弟分であつた。

十二、三歳の頃から父木ノ宮栄造の手許で芸を仕込まれ、戦争中も満州巡業や軍・工場の慰問興行をつづけながら磨きをかけてきた明美の演技は、水際立ったものであつた。とりわけ、斜めに張りわたした鉄線の上で曲芸をする「坂綱」や、空中ブランコでも難芸とされる「メクラ飛行」や「ダブル旋回」は、この道ひとすじ、十五年のキャリアを語る彼女の至芸

であつた。シマダ・サーカスが極東サーカスを接収することによつて得た最大のプラスは、太夫木ノ宮明美の芸であつたといつても、いいすぎではないだろう。水芸を新たに演目に加えることができたのも、彼女を得たことによつてだつた。日本舞踊も、彼女は若柳流の名取だつた。目が大きく、鼻筋の通つた、見ばえのする容貌も、太夫・踊子あわせて二十五人ほどの女たちのすべてを引きはなしていた。つまり木ノ宮明美は、シマダ・サーカスのピカ一スターであつた。どの土地の興行でも、彼女の芸は観客を魅了して、評判をよんだ。

札幌駅を出た列車は、晩春の石狩平野をまっしぐらに北上していた。駅のホームで買いこんだ飲み物や果物がみんなの手許に行きわたつた頃、後見長こうけんちやうの黒松爺さんが明美のところへやつてきて、ちよつと掛けるよ、と札幌で空いたばかりの隣りの座席へ腰をおろしながら、^{しゃが}嘎れ声で云つた。

「あんた、名寄はおなじみなんだろう？」

「いいえ、旭川から北へは、あたし、行つたことがないの」

「ほう、こいつは意外だ」と老人は、不精髭の伸びた長い顎をなでて、「自慢じゃないが、わしは北海道なら、行かない土地はないね」

「おじさんのお家は、やはり札幌？」

「うん、札幌は札幌だがね、こうやつて旅ばかりしてたんじゃあ、ばあさんの顔も忘れちまわあ」

「まさか」

「それは冗談だが、明美ちゃん、一つだけ年寄りの話を聞いてくれるかね」

笑っていた皺しわの多い顔が真顔まがおになると、明美は顎を引いて頷いて見せた。

「極東サーカスもおなじだろうと思うんだが、うちのサーカスでは野合やごうがご法度はつとだ。つまり、掟おきてというやつだな」

「……………」

野合という古風な言葉がのみこめない明美の顔つきに気づいて、黒松爺さんは、さらに云った。

「その辺にも夫婦者がいるが、あれは団長の媒酌ばいしやくといっちゃあ大袈裟おおげさだが、いわば公認で夫婦になった連中だ。勝手に夫婦同然の仲になった者があると、うちじゃあ、なかなかうるさい。むろん、噂になったりして表面に出た場合の話だよ。わからなけりやそれまで、とまあこういうわけだ。サーカス育ちのあんたに、よけいな差し出ぐちかもしれんが、美人を見terると、つい心配になってね」

「いやなおじさん」

董色すみれのツープースの腰をつついた後見長を、はにかんだ目で見返しながら明美は、熱っぽく潤うるんだように見える河津研次の目を内心に想いうかべて、胸をあつくしていた。

窓外のひろびろとした田園風景は、澄みきった空気の底で、刻一刻と暮れ落ちて行った。

（研さんとあたしのこと、おじさんは感づいているみたいだわ）

自分の席へ引きあげて行く黒松爺さんの、老齡を感じさせない、しゃっきりした後ろ姿を

眺めて、明美は呟いた。そして、黒松のさりげない忠言の意味を、ばれないようにうまくやれと云ってくれたのだらうかと、どちらかといえは身勝手なうけとり方を、彼女は、しているのであった。それというのが、自分は経営主の養女であり、いずれはこのサーカスが自分のものになるのだという自負と驕慢きょうまんの気分が、彼女にある所為せいかもしれないなかった。

サーカス社会は、稼業があらあらしいだけに、セックスも乱脈に流れがちである。おそらくそのためであらう、男女関係に対する上からの規制や掟はきびしかった。親の代からのサーカス人間である明美が、それを知らないわけではない。が、ほんらいが団長の娘である彼女は、規制や掟を上うのほうから見ているところがあつた。つまり甘く考えていた。

そんなふうだから、盛岡城址での興行を打ちあげた日の夜、街裏の旅館で河津研次と二人だけのひそかな時間を持ったのも、明美のほうから誘つたようなものだった。

さいしょ、街に誘つたのは河津のほうだったが、それは明美にプレゼントする品物を本人に選ばせるためであつた。明美が肌着の洗濯などをよくしてくれるので、その札の意味だと河津は云つたが、日ごろ、彼の熱い目がいつも自分をつつんでいるのを想つて、明美は軀からだをほてらせていた。賑やかな大通り一丁目の商店街で模造革のハンドバッグを求め、かんたんに包装された包みを店員からうけとるとき、二人だけの秘密な空気がいつからか生れ、それを呼吸していると明美は思った。

彼女を旅館などへ引き入れる気で河津は街へ連れ出したのではなかったようだが、大通り商店街と並行した開運橋通り寄りの旅館街の暗い灯が見える辺りで、

「ねえ、……女の人と、こういう家へ行つたことある？」

明美が囁くのを聞くと、

「いや」

と彼は否定して、相手の顔を覗きこむようにし、やがて、急に憑きものでもしたような様子になって、その二軒へ足をはやめたのだった。

三日前に名寄へ発つて行つた河津のことを想うともなく想つて、それで頭がいっぱいになっている明美の前に、当の河津研次がとつぜん姿を現わしたのは、札幌を発車してから三時間余り、列車が旭川駅のホームに着いた直後だった。

車室の扉をあけてはいつてきた河津を、若い女たちは、きゃーっというような嬌声をあげて迎えたが、彼は照れた笑いをうかべながら、彼女らの前を素通りして、通路を急ぎ足に明美のほうへ近づいてきた。名寄にいるはずの研さんがなぜ旭川駅で……、という疑問を頭にうかべる間もなく、

「明美ちゃん」と河津は声をかけてきた。「お父さんが危篤だ。すぐに降りなくちゃ！」

「あら……」

「さあ、急いで。荷物は？」

網棚からボストン・バッグをおろすなり、河津は明美を急ぎ立て、先に立つて通路を扉のほうへ急いだ。

ホームへ降り立つてから、

「札幌の興行部へ知らせがあつて、札幌から名寄へ連絡がきたんだ」

「それで、研さん、名寄からわざわざ出てきて、汽車が着くの待っていてくれたのね」

「ほかにも団長に急用があつてね」研次は、浅黒い長めの顔に、はにかみ笑いをうかべて云つた。「……お父さんの病氣は何だい」

「血圧も高いし、ずっと前から肝臓がわるいのよ」

「ふーん、……まあ、早く連絡がついてよかった」

「初日しよにちまでには名寄へ行くわ」

発車のベルが鳴っていた。研次は、提さげていたポストン・バッグを明美に渡した。うけとつた明美の手を両手で包みこんで、

「じゃ、気をつけて」

彼は云つた。抱きしめたい想いを、束つかの間の手の触れ合いにこめるしか仕方がないのだ。ベルが鳴りやむと、研次は列車のデッキにあがつた。

列車が動きだし、ホームに立つた明美の姿はぐんぐん遠のいて行つた。

研次はデッキの扉を閉めてから、車室にはいり、団長の顔をさがした。

2

車室の中ほどの窓際の席から、伸びあがつて手招きしている桜井清典しやくでんの赤銅色しゃくどうの丸顔に気づくと、研次は、通路を急いで近寄り、あいている団長の前の席に腰をおろしながら、

「明美ちゃんの親父さんが危篤^{きとく}なんで、ここで降ろ^おしました」

「そうかい、ご苦労ご苦労」

黒い革のチヨツキに、ゆったりしたホームスパンの上衣を着た桜井団長は、領^{うなず}いて、隣りに坐った楽長の五百住^{いおずみ}に、

「木ノ宮栄造^{さだ}といやあ、ひと頃は魔術王なんていわれて、たいした人気だった」と、シオカラ声で云った。「人間大砲^{だひょう}なんかも、たしか、あの男が元祖^{げんそ}じゃなかったかな」

「サーカスに生き、サーカスに死す……」

バンド・マスタ^{マスター}は詠嘆^{えいたん}調で、木ノ宮栄造^{さだ}がもう世に亡^ない人であるかのようなことを呟^{ささや}いた。

「サーカスの演目に欠かせない魔術は、たいてい、団長クラスの芸とされ、シマダ・サーカスでも、“人体輪切り”、“人間大砲”の魔術は、桜井団長の持ち芸であった。

「団長」

と、研次が身を乗り出して云った。

「名寄で騒動^{さわどう}がもちあがってるんですよ」

「騒動？」

「切符のことで、もめてたらしいのが、昨日、とうとう小屋主が斬られちゃったもんだから……」

「小屋主って、おい、桂さんか？」

「そうです」

「で、傷は？」

「いのちに別状はないってことですがね、万屋一家は火がついたようになって、今朝がた、松木組に果し状をつけたそうです」

「松木組がやったんなら、そりやあ当然、そういうことになるだろう」

シマダ・サーカスが六月二日から、そこで興行のフタをあけることになっている千歳劇場の経営者桂欽吾は、博徒でもテキヤでもないが、親の代からの大地主で、いわゆる旦那親分であつた。彼がテキヤ万屋一家の親分大下清吉に肩入れしているところから、千歳劇場の従業員の半数が、支配人の矢尾をふくめて、万屋一家の息のかかった男たちである。日ごろから闇市の縄張りをめぐって対立関係にあるテキヤ松木組の幹部に、矢尾がたまたま出遇ったとき、

「おい、サーカスの招待券よこせよ」

と先方が云つたのだそうだ。

「招待券は渡すけど、顔で通るのはこまるぜ」

「お前、話わかるじゃないか」松木組の幹部は、すごんで見せた。「すると、招待券は二百枚か、それとも三百枚か」

「ばかにするな！」

「そんなタンカを切ってもいいのか、おい。松木組がその気になりや、興行をさせねえよう」

にすることだつてできるんだぜ」

「勝手にしやがれ」

「あとになつて、吠えづらくなよ」

そんな応酬があつたらしいと、河津研次は団長に話した。

旅興行のサーカスが土地のヤクザにいためられるのはよくあることで、それを防ぐために然るべき挨拶をして手を打っておくのは、歩方のしごとである。名寄興行の歩方は万屋一家の大下清吉であつた。

招待券を五十枚も松木組へとどけておこうと大下が考えていた矢先に、右のような偶発事故があつて、こじれた。

河津の話は、つづく――。

彼が道具方三人といつしよに、先乗りで名寄に着いたのは、五月二十七日の夜である。駅から歩いて十分あまり、南九丁目の千歳劇場へ行くと、待っていた矢尾支配人が、

「やあ、ご苦労さん」

と、にこにこしながら事務室から出てきた。河津は自己紹介して、

「どうも、お世話になります」

「さっそくだけど、今日は皆さん、楽屋へ泊ってもらつつもりで、蒲団の用意はしてあるんだが、それでいいかね？」

「けっこうですとも」